

『平家物語』における平経正と青山の琵琶説話考

由井 恭子

(一) はじめに

『平家物語』は、源平合戦を中心に描く軍記物語である。しかし、物語中には合戦場面だけではなく、盛者必衰、因果応報観、無常観など仏教的側面を描く場面や、小督説話のように王朝文学的場面など、様々な話型が内包されている。また、これまであまり注目されてこなかったが、物語中には、芸能に関する説話も多く存在する。本稿では、平経正が登場する、青山の琵琶の説話形成を中心に、『平家物語』の説話生成の手法について考察していきたい。

(二) 平経正と琵琶

まず、『平家物語』に描かれた経正像と、史実との関係を確認していきたい。

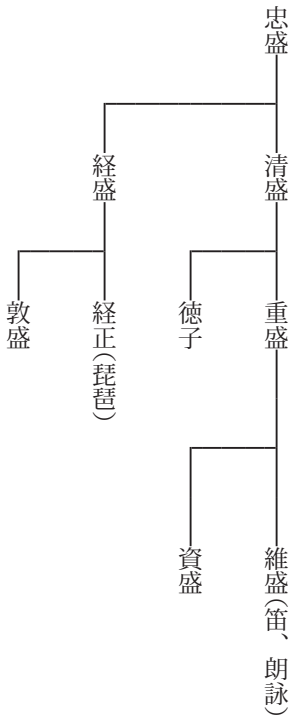
『建礼門院右京大夫集』^①には、中宮徳子と平家の人々が、仲良くふれあう場面が残されている。ここで、経正たちによつ

て、楽器の演奏がなされていることに注目したい。

春ごろ、宮（徳子）の西八条（清盛邸）に出でさせたまへりしほど、大方に参る人はさることにて、御はらから、御甥たちなど、みな番に下りて、二三人はたえず候はれしに、花の盛りに、月明かりし夜、「あたら夜を、ただにや明かさむ」とて、権亮（維盛）朗詠し、笛吹き、経正琵琶弾き、御簾の内にも琴掻き合せなど、おもしろく遊びしほどに、内より隆房の少将の御文持ちて参りたりしを、（以下省略）

ここでは、中宮であつた徳子を囲み、維盛、経正を中心に、平家の公達たちが、楽を奏した様子が描かれている。これは、平家一族の絶頂期ともいえる、華やかな宴の場面であり、非常に貴重な資料である。「御はらから、御甥たちなど、みな番に下りて」とあることから、平家の縁者の多くが、この場に居合わせ、賑やかに過ごしたのであろう。中宮徳子が清盛邸にお出ましになった、非常に晴れがましい場面で、維盛が朗詠と笛を担当し、経正が琵琶を弾いたという。ここからも、やはり、一族の中でも経正は、琵琶の名手として認識されていたと考えられる。

【系図一】平家関係系図 *（ ）内の注記は、前頁『建礼門院右京大夫集』において担当した音楽である。



【系図一】に平家関係系図を示したが、経正と徳子は、いとこ関係にあたる。『建礼門院右京大夫集』は、建礼門院徳子に仕えた女房の和歌集である。そのうえ、右京大夫は、資盛と恋人関係にあったため、平家に関する記述は、信憑性が高いと考えられる。

また、琵琶西流孝道の記した『残夜抄』²⁾には、経正を「いみじきやさしきすき人」と紹介している。

つねまさ^{経正}とく^(て懸) いみじきやさしきすき人ありき。それがしうとめにて。能登あまといふこと^争びは^{琵琶}の上
手ありき。(以下省略)

ここでは、経正のしゅうとめ「能登のあま」も箏と琵琶の名手の「上手」として紹介されている。『尊卑分脈』などにも、経正の婚姻関係は明らかにされておらず、『残夜抄』は貴重な資料といえよう。なお、「能登のあま」については、現在のところ未詳である。『残夜抄』の作者藤原孝道は、仁安元(一一六六)年から嘉禎三(一一三三)年に、生存した人物である。一方、経正は、生年は未詳であるが、寿永三(一一八四)年、一の谷の合戦で討ち死にした記録がある。経正の没年から逆算すると、孝道と経正は同時代を生きたと考えられる。そのうえ、経正は、幼少期に、仁和寺覚性法親王に仕え、琵琶の名手として名高かった。孝道も、琵琶西流の者であり、仁和寺のあたりに居住していた。これらを考え合わせると、両者の間に琵琶を介して、交流があった可能性も見逃せない。以上のことから、『残夜抄』の伝承も信憑性が高いと考えられる。

このように、経正は琵琶をたしなみ、中宮徳子の前でも演奏するほどの腕前であった。さらには、琵琶の名手孝道に「いみじきやさしきすき人」と評される人物であったと、確認することができる。

(三)「延慶本」と経正一族

ではまず、経正一族が主要な登場人物として「延慶本」に登場する箇所を確認する。^③

第三末 廿九 薩摩守道ヨリ返テ俊成卿二相給事

卅 行盛ノ歌ヲ定家卿入新勅撰事

卅一 経正仁和寺五宮参ズル事付青山ト云琵琶ノ由来事

卅二 平家福原仁一夜宿事 付経盛ノ事

第五本 廿五 敦盛被討給事 敦盛頸八嶋へ送事

これらの章段に、経正一族関連の説話を見出すことができる。

本稿では、主に「第三末 卅一 経正仁和寺五宮参ズル事付青山ト云琵琶ノ由来事」の説話について考察する。廿九には、薩摩守忠度と俊成の和歌説話が配列され、その後卅二には、都落ちし福原に落ち着いた平家の様子とともに、経盛が笛の名手である様子が描かれていて注目される場面である。平家都落ちに際して、秘曲を伝授されていない経盛の弟子二人が、経盛とともに都を離れ、経盛から笛の秘曲を授かる芸能説話が載る。ただし、現在のところ、経盛の笛の演奏記録は見つけられていない。

また、弟の敦盛も、「第五本 廿五 敦盛被討給事 敦盛頸八嶋へ送事」敦盛最期の場面で筆築を吹く貴公子として描かれるが、筆築の演奏記録は残されていない。「覚一本」では、敦盛が最期まで持っていた笛は、小枝といい、鳥羽院 忠盛 経盛 敦盛と伝承したと記され、由緒正しき継承者としての役割を感じさせる。

一方、経盛は歌会を開き、『千載集』などの勅撰集に入集されるほど、和歌の造詣は深かった。しかし、『平家物語』

では、経正一族は、和歌的側面よりも、芸能的側面に着目され描かれているといえる。

(四) 「延慶本」における経正説話

それでは、本稿でとりあげる説話の梗概を確認する。梗概はA～Eの、5つのブロックに分けた。

延慶本「平家物語」三末・卅一経正仁和寺五宮参ズル事付青山ト云琵琶ノ由来³

〔A〕 経正、琵琶の名器青山を返却のため、仁和寺を訪れる。

経正は幼い頃から仁和寺の守覚法親王（史実は覺性法親王）に伺候していた。都落ちに際し、昔のよしみが忘れられず、仁和寺を訪れた。経正は鎧直垂姿であったが、守覚法親王は招き入れる。経正は青山の琵琶を、手放したくはなかったが、このような名物を海底に沈めるのは惜しいので、返却に参上した。

〔B〕 青山の由来

昔、藤原貞敏が唐に渡って、琵琶の博士・簾承武に会い、秘曲三曲を伝えられた。そのときに、青山の緑の梢から天人が天降り、巧みに袖を翻して舞を舞った。廉承武はこの奇瑞に驚き、琵琶を青山と名付けた。

〔C〕 村上天皇の奇瑞

村上天皇の時代（九四六～九六七年在位）に、帝が秋の夜長に、この琵琶で万秋楽をお弾きになる。五六帖の秘曲にさしかかると、天人が天降り、巧みに舞を舞い、瞬時に戻っていく奇瑞が起こった。この後、この琵琶は凡人が弾くことはなくなったので、代々の帝の重宝となったが、次第に仁和寺の第一の重宝となった。

D 経正の奇瑞

経正が十七歳のとき、宇佐宮の神殿で海青（生）楽を演奏した。すると神明が納受し、天童となり現れ、社壇で舞いなざる。経正はこの奇瑞を拝して、流泉の曲をしばらく奏でたので、その場に居合わせた人は皆、感涙の涙を流した。

E 経正、仁和寺に青山を返却する。

村上天皇の時代から、凡人はこの琵琶を弾くことは経正一人であった。このような靈物なので、経正は身にかえても惜しいものだと思っただけけれども、仁和寺にお返しする。経正と守覚法親王は和歌を贈答し、別れを惜しむ。

この中で、特にB、C部分と重なる説話が『古事談』『十訓抄』『文机談』に見られる。各説話内容が少しずつ異なるため、説話対照表を作成した。

【説話対照表】 延慶本B・C部分

秘曲伝授 (誰が誰に伝授したか)	廉承武が貞敏に	廉承武が貞敏に	字劉二郎廉承 武が貞敏に	廉承武が貞敏に			
秘曲	三曲	授け残した曲あり	授け残した曲あり (上原石上流泉)	一曲残す (上原石上流泉)			
青山由来	○	×	×	×			
琵琶を弾く人物	村上天皇	村上天皇	村上天皇	源高明			
琵琶の種類	青山	玄上	玄象(上)	明記されず			
奇瑞を導いた曲名	万秋楽 五帖六帖	×	×	×			
奇瑞	天人天降る	影のような者が空から 飛んできた	影のような者が空から 飛んできた	霊鬼や木霊			
授け残した曲の 伝授	×	廉承武霊が 村上天皇に伝授	廉承武霊が 村上天皇に伝授	廉承武霊が 高明に伝授			

表に掲げたテキストについて確認する。まず「延慶本」については、現存する応永書写本は、応永二六(一四一七)年～二七(一四二〇)年に書写され、その祖本は、延慶二(一二三〇)年～三(一二三二)年に、書写されている。『古事談』は源顕兼編、建暦二(一二二二)年～建保三(一二二五)年の間に成立している。『十訓抄』は編者未詳、建長四(一二五二)年に成立している。『文机談』は、琵琶西流藤原孝時弟子、文机房隆円著、文永年中(一二六四年～一二七五年)の奥書があるが、それ以降(一二八三年)の記述もあり、増補された可能性がある。

この対照表から、『古事談』と『十訓抄』は、近い関係にあることが確認できる。特に、「琵琶を弾く人物」と、「授け残した曲の伝授者」が、『古事談』『十訓抄』では村上天皇であるのに対し、『文机談』のみ源高明になっているのが、大きな相違であり、『文机談』は類似説話であるが、異なる伝承であると考ええる。また、琵琶の種類についても、『古事談』『十訓抄』は玄上としているのに対し、『文机談』では明記されていないことも、『文机談』が、『古事談』『十訓抄』との関連性が少し低いと推察させる要因である。

当該説話に関して、水原一氏と磯水絵氏がすでに言及されているので、確認していきたい。

水原一氏は『延慶本平家物語論考^⑤』において、『平家物語』諸本の青山の琵琶説話を比較検討され、以下のように指摘されている。

また延慶本では前出している村上帝と廉承武の話を語り物系はここに置き、村上帝が弾いていた琵琶は玄上、廉承武は御前にあつた青山を弾いたとして青山の格を高めているがもちろん古事談などを基点とする説話を利用したものである。それも延慶本の如き村上帝の弹奏に天人が出現した事へ続く形が契機となったに相違ない。

名演奏に応じて故人・靈魂・天人等が感動し出現するのは説話に数多い事で、先後・影響関係を整理するのは不可能に近いが、語り物系の青山説話が延慶本の方の下流に生まれて来るものである事は断定できるのである。

このように水原氏は、青山の琵琶説話は、『古事談』などを参考にして本説話が生成されたとしつつも、先後・影響関係を整理するのは不可能に近いと指摘し、典拠を明らかにされていない。

続いて、磯水絵氏は『院政期音楽説話の研究^⑥』において、平経正と琵琶や仁和寺の関係について考察されている。そして、藤原貞敏の琵琶の師匠が、劉次郎と廉承武と二系統に伝承が別れていることに着目されている。さらに、これらの説話を整理され、『平家物語』と『古事談』の近似性を指摘したうえで、『文机談』などの他の説話との関係を、慎重に再検討する必要を訴えている。

以上のように、先行研究において、『平家物語』青山の琵琶説話は、『古事談』との関係が注目されてはいるが、『古

事談』のみを典拠とするには確証がなく、他の説話集に関しても慎重に再検討すべきであると認識されている。

(五) 「延慶本」の引用方法 — 『宝物集』を中心に —

山田昭全氏は『平家物語と仏教』の中で、「延慶本」の『宝物集』引用方法を、一 直接引用、二 構想引用、三 翻案、と三種類に分けて詳細に論考されている。

この三つのタイプを検証して『宝物集』と延慶本の親密な関係を論じてきたのであるが、両者の関係の深さをはかるものは一見すると第一のタイプにあるように思われるけれども、実際は第一よりも第二、第二よりも第三のタイプの方が親密度が高いとみるべきことなのである。延慶本が『宝物集』から三つのタイプの影響を受けているということは、他のいかなる典拠よりも『宝物集』からの影響が大きいものであったということを物語るものだと思ふ。極端な言い方をすると、『宝物集』が存在しなかつたら延慶本の卒塔婆流し、あるいは建礼門院の六道巡りの告白、さらには大原での草庵生活の描写などは書かれなかつたかもしれないという重大な推測を生むのである。

このように、延慶本「平家物語」の『宝物集』引用について、三タイプの引用が見られることこそが、『宝物集』の影響の大きさを物語っていると述べられている。では一例をあげ、「延慶本」と『宝物集』の関係を見ていきたい。『宝物集』の関連部分を確認していく。⁹⁾七巻本『宝物集』巻三 愛別離苦

鬼界島に侍りけるころ、いまだ生き

たるよしを、母のもとへ申つかはしけ

る

沙弥性照

さつまがた奥の小島に我ありとおやにはつげよ八重の塩風

蘇武が胡国にまかりて、十九年までふるさとかへらざりけんも、都はこひしく侍りけんかし。漢王、上林苑といふ所にてあそびたまひけるに、雁の足に文をつけたりけるを見たまひければ、蘇武が文なりけり。いまだいきてありけりとて、めしかへされにけり。雁書の事、歌にもおほく読みて侍るめり。

紀友則

秋風に初かりがねぞ聞ゆる誰が玉章をかけてきつらん

藤原長能

吾妹子がかけてまつらん玉章をかきつらねたる初かりがねのこゑ

よみ人しらず

玉章をかけてきつれどかりがねのうはの空にもきこゆなるかな

西行法師

鳥羽にかく玉章の心ちして雁なきわたる夕やみの空

七巻本『宝物集』巻三、愛別離苦には、康頼が鬼界島で母につかわしたとする「さつまがた」の和歌があげられている。そして、その直後に蘇武譚が配列され、続けて雁書にまつわる和歌が収載されている。山田氏はこの場面について、『宝物集』において、康頼の和歌と蘇武譚が並んで配列されたのは偶然であるが、「延慶本」編者は積極的にここをペアとして受け止め、康頼のことを詳しく記述しようとはかたたと考察されている。¹⁰⁾

「延慶本」では、康頼と成経のもとに櫛葉が散り、その一枚に「帰雁二と虫食いがあつた場面や、康頼が、「さつまがた……」などの和歌を卒塔婆に書き付け、それが熊野新宮と厳島神社に流れ着いた話に続き、蘇武譚が続く。「延慶本」は明らかに、『宝物集』のこの場面から、鬼界島、「さつまがた」の和歌、雁書などモチーフを選び、物語を編集し直しているといえる。

この他にも、『宝物集』冒頭部分や、結びの部分にも、「延慶本」の卒塔婆流譚に影響を与えた部分が散見している。ここからも、「延慶本」が、他のテキストを引用する様子が、かいま見られる。ある部分をそのまま抜き出すだけではなく、その前後にある説話も「延慶本」のなかに取り込み、変更していく。引用部分は、ある一部分だけでなく、離れた場所にあるものも、つなぎ合わせ「延慶本」のなかに取り込んでいるのである。

(六) 「延慶本」 青山の琵琶説話と『古事談』

(五)で確認した、「延慶本」の引用方法を踏まえながら、改めて、「延慶本」と『古事談』の関係について考察したい。(四)でもふれたとおり、先行研究においても、『古事談』二十一話と、「延慶本」青山の琵琶説話の近似性が指摘されていた。本稿においては、『古事談』二十一話だけでなく、その最後の説話にも着目し、「延慶本」との関係を考えている。^①『古事談』巻六・一八話から二四話までの本文を掲げる。下線部以下には、『古事談』と関連する可能性がある「延慶本」の章段を記した。また、アルファベットは、(四)青山の琵琶説話梗概と対応させた。

『古事談』卷六（『新日本古典文学大系』四一）

一八話【箏】

博雅三位【延喜第一皇子、兵部卿克明親王息、母時平公女】の箏譜の奥書に云はく、「万秋楽を案ずるに、序より始めて六の帖に畢るまで落涙せざること無し。予誓はく、世々生々、在々所々、箏を以て万秋楽を弾く身と生まれむことを。凡そ調子の中には盤涉調殊に優れり。楽の中には万秋楽殊勝なり」と云々。博雅は此の調子並びに此の楽を愛するに依りて、都卒の外院に生まれたる由、経信卿の伝へに見ゆ、と云々

一九話

高野御室【覚法か、白川院御子、又た獅子王宮と号す】御寵童其の師匠の料に、孝博を鳴滝に家つくりて居糸給ひて、種々御いとほしみありて、常在、参川【後に法眼に補す。三川聖人。高野山に住す】に、箏・琵琶をならはせさせ給ひけり。常在には琵琶、参川には箏、各器量も相ひ叶ひて、秘曲ども授けけり。参川に千金調子授けてけりと、富家人道殿聞し食して、孝博を召して、「実にや、千金調子、御室なる児にをしへたむなる」と問はしめ給ふに、孝博申して云はく、「召して聞し食すべし」と云々。之れに依りて御室へ「箏よく弾く童の候ふなる、給ひて聞き候はばや」と申さしめ給ひたりければ、御室興に入り給ひて、参川を進ぜられけり。御前に召して、楽などあまた引かれて後に、千金調子をひかせらるるに、「正躰無き僻事共なり」と。童退出せる後、又た孝博を召して仰せられて云はく、「千金調子僻事為る由、申さしむべきなり」と云々。孝博「今暫く助けしめ御すべし。忽ちにまどひ候ひなむず」と申しけれど、「僻事なり。汝も我れも存生の時、謝し頭はしめずは、後代の狼藉為るか」とて、ありのままに御室に申さるる間、孝博不日に追却に預かり畢んぬ、と云々。

第三末 卅一 経

正仁和寺五宮参ズ
ル事付青山ト云琵琶ノ由来事

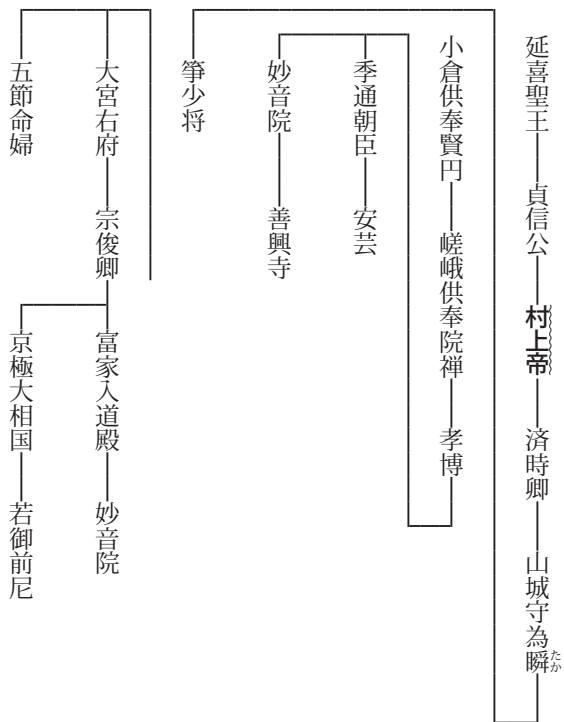
C 万秋楽

第三末 卅一 経

正仁和寺五宮参ズ
ル事付青山ト云琵琶ノ由来事

A E

仁和寺にまつわる
琵琶（芸能）説話



二二話

村上聖主、明月の夜、清涼殿の昼御座ひのおましにおいて、玄上くわじやうを水牛の角の撥ぼちにて引き澄まして、只だ一所御座おほしましけるに、影の如くなる者、空より飛び参りて、孫庇まごぢに居りければ、「彼れは何物ぞ」と問はしめ給ふ処、申して云はく、「大唐の琵琶博士廉承武れんじやうぶに候ふ。只今此の虚そらを罷り通る事候ひつるが、御琵琶の撥おとのいみじさに参入する所なり。恐らくは昔、貞敏に授け胎たごす曲の侍るを授け奉らむと欲おもふ」と云々。

貞敏をば、妙音院入道は常に「吾が祖師、守宮令」と仰せられけり。玄上の事を江中納言に人の問ひければ、「慥かなる説を知らず。延喜の此玄上宰相と云ひける琵琶引きの琵琶やらむ」とぞ答へられける。

二二話

貞敏渡唐して、廉承武の婿と成り、一年の間、琵琶の曲を究め習ふ、と云々。帰朝の時、紫檀むらさきだんの琵琶二面を得たり、と云々。又金を以て廉承武に与ふ、と云々。玄上は件の琵琶の其の一なり、と云々。

二三話

玄上撥面の絵の事、師時卿記に云はく、「打毬だきゆうの唐人二騎なるか。是れ左府の仰せなり」と云々。師時卿記に云はく、「保安元八二十、左大臣殿云はく、故二条殿ものがたり語ことばの次に云はく、玄上の絵様は、馬上において打毬する者、毬杖きうちやうを腰に指して舞ふ形なり。良道の撥面は件の躰くたんを撰んで

第三末 卅一

經正仁和寺五宮参
ズル事付青山ト云
琵琶ノ由来事

BC

第二本 廿八

師長尾張国へ被流
給事付師長熱田ニ
参給事

第三末 卅一

經正仁和寺五宮参
ズル事付青山ト云
琵琶ノ由来事 B

第三末 卅一

經正仁和寺五宮参
ズル事付青山ト云
琵琶ノ由来事

之れを凶す。良通本の如くなりは是れ紫藤の琵琶なり。世に留まるは即ち彼れにして。見在すれば定め
て其の躰顕然たるか。

二四話

妙音院入道、配所土左国より帰洛する時、資賢卿、彼の亭に参向し、面謁ついでの次に、「何なる事
共か候ひけむ」と申されければ、返事はなくて、「幹康独往之栖」と云ふ句を詠み出で給ひたり
ければ、按察あぜち落涙して退出す、と云々。

B 青山由来のヒ
トとなつたか。
第二本 廿八
師長尾張国へ被流
給事付師長熱田二
参給事と関連があ
るか。

『古事談』巻六・一八話では、博雅三位が箏譜の奥書に万秋楽の序から六帖を愛していた旨を残したことが描かれて
いる。「延慶本」においても、青山の琵琶説話のなかで、村上天皇が演奏した楽が万秋楽であったことが注目される。
次に一八話には、仁和寺高野御室が寵愛する童の、音楽の師匠として、藤原孝博（琵琶西流）を採用し、二人の童に、
箏と琵琶の秘曲を伝授した説話が配列されている。ここでは、説話の舞台が仁和寺であること、そして、仁和寺にお
ける琵琶説話であることが注目され、「延慶本」の当該説話構想のヒントになつた可能性が考えられる。二十話では、
箏の血脈が示され、村上帝の名が見られる。

二一話は、かねてから「延慶本」青山説話との関連が深いと考えられている説話である。また、下段にも指摘した
が、本説話は「延慶本」第二本・師長尾張国被流給事付師長熱田二参給事においても、引用されている箇所である。

二二話は、藤原貞敏と廉承武の説話が載る。二三話は、琵琶玄上の撥面の絵の由来を記しており、琵琶青山の由来
構想のヒントとなつた可能性も考えられる。二四話は、妙音院師長が、土佐国から帰洛する際のエピソードが記され
ている。

このように、『古事談』二一話前後をよく見ていくと、芸能にまつわる話が配列され、しかも、万秋楽説話や仁和寺説話など、「延慶本」の当該説話生成のヒントが、ちりばめられている。

ちなみに、『古事談』と近い関係にあると考えられる『十訓抄』では、卷十ノ一九に配列されている。『十訓抄』巻十は、「才芸を庶幾すべき事」と標題が付され、「能」に焦点を絞り説話を配列し、和歌、朗詠、管絃など様々な分野の才芸についてふれている。¹²⁾

一九話前後の説話をあげると、

一七話 藤原成通の今様朗唱

一八話 五節の舞姫の起源

一九話 廉承武の霊 源高明の琵琶 藤原定頼と陽勝仙人

二〇話 博雅三位と朱雀門の鬼 浄蔵の笛を、鬼、賛嘆

二一話 妙音院師長、熱田社で朗詠

二二話 中将守通、天王寺で雅楽

と配列されている。博雅三位や妙音院師長など、芸能の名手の説話を載せるが、「延慶本」の、青山の琵琶説話の構想にかかわるような説話は、見つけることはできない。

また、『文机談』の類話は、源高明説話の一話として『文机談』では配列されている。

『文机談』の配列を以下に掲げる。()内は、私に注記したものである。

西宮伺聞脩曲絃事 (源脩の弟子として、源高明が登場)

三秘体法事 (高明の時代に、琵琶の秘曲が一曲加わった)

霊推参事 (当該説話 廉承武霊が高明に姿を現した)

霊授曲事 (当該説話 廉承武霊が琵琶をかきならす)

靈婦仙事

(当該説話 廉承武靈が上原石上の曲を授けた)

信明賜曲事

(博雅が、弟子信明に、新しい秘曲を伝授させた)

古事談事

(古事談の伝承は、高明ではなく村上天皇になっているが、村上天皇は、箏の演奏者として有名だが、琵琶については不審である)

このように、『文机談』説話前後にも、「延慶本」当該説話構想の、ヒントとなった箇所は、見つけれない。「延慶本」の『宝物集』引用方法を見ても、直接文言を引用するだけでなく、構想のヒントにすることも多く見受けられることから、当該説話は、『古事談』を参照にした可能性が高いのではないかと推測できる。

(七) 「延慶本」と『古事談』の影響関係

では、この他の場面で、「延慶本」と『古事談』が近い関係にあると推察できる場面を、いくつかあげていきたい。『古事談』巻三、十二話の般若寺の観賢説話、巻四、十六話の伊予入道頼義往生説話、巻五、三十三話の清盛大塔建立説話、巻五、五十四話、西行崇徳院鎮魂説話などは、「延慶本」にも類似説話があり、注目される。しかし、ここに掲げた説話は、『古事談』と「延慶本」以外にも、多くの文献に残されているものばかりであるため、『古事談』からの引用であるとは断言できない。

また、現在管見の限りにおいて、『古事談』と『平家物語』のみに見られる説話があるので紹介したい。これらの比較については、落合博志氏の論を参照した。¹⁴⁾

『古事談』卷五、三十話⁵

天台宝幢院【惣持院か】は塔婆の御舍利を安置せらる。貞元の比、雷公の爲めに之を取らる。爰こに成安阿闍梨、「争でかざる事あらむ」とて加持して、慥かに返し置くべき由責め伏する間、黒雲出で来たりて、件の舍利の筥返し置き畢んぬ。但し、瑪瑙のとびら二枚返し置かず、と云々。而るに元暦の大地震の時、件の瑪瑙の扉出来ず。奇しみ見る処、御舍利失せ畢んぬ、と云々。

「延慶本」第六末・二 天台山七宝ノ塔婆事¹⁶

抑今度ノ大地震之間ニ天台山ニ不思議ノ事アリ。惣持院ノ七宝ノ塔婆ニ仏舍利ヲ奉安置ケルヲ、円融院御宇貞元二年ニ雷落テ、此御舍利ヲ奉取テ、分雲^ラアガリケルヲ、修験ノ聞ヘ世ニ有ケレバ、淨安律師ト申シ人、是ヲ御覽ジテ、「彼御舍利ヲ奉取留^メニトテ、十二神將ノ呪ヲ満ラル。丑時ノ番ノ神、照頭羅大將走出テ、雷電神ヲ取テ伏テ、仏舍利ヲ奪返奉リヌ。雷猶腹ヲ立テ、塔婆ニ立ラレタル瑪瑙ノ扉ヲ取テ上リケルヲ、衆徒一同ニ、「同ハアノ扉ヲモ取留給ヘ」ト申ケレバ、末代ノ世トナリテ、此龍必ズ来テ、彼扉ニ此舍利ヲ奉取替^フズルナリ。夫我世ノ事ニ非トテ、遂ニ扉ヲバ不止給^フ。其後二百余歳ヲ隔テ、今度ノ大地震之間ニ此龍落テ、過ニシ貞元之比、取テ昇リニシ瑪瑙ノ扉ノ以テ来テ、七宝之塔婆ニ立テ、舍利ヲバ取テ昇リヌ。(以下省略)

この説話を『古事談』を中心に整理すると、

- ・ 比叡山惣持院に仏舍利が納められていた。
 - ・ 貞元の頃(九七六年〜九七八年)、落雷があり、雷によって舍利が奪われた。
 - ・ 成安(淨安)が祈祷し、仏舍利は戻ってきたが、瑪瑙の扉は奪われたままであった。
 - ・ 元暦の大地震で、瑪瑙の扉が戻ってきたが、仏舍利が奪われてしまった。
- となるであろう。落合氏は、「延慶本」の説話は『古事談』説話より詳しく、そのうえ、相違点も見られるが、基本

的には同一の説話と見なしてよいと結論づけられている。¹⁷

本章では、『古事談』巻六、二十一話前後の話群が、「延慶本」に引用された可能性について探ってきた。この説話の他にも、「延慶本」と『古事談』の関連が指摘されていることを確認した。

(八) むすび

経正一族は、経正以外が楽器の名手だった記録は残されていないが、『平家物語』では芸能に秀でた一族として位置づけられている。ここには、滅び行く平家の公達たちへの、あたたかいまなざしが感じられる。

「延慶本」の青山の琵琶説話は、先行研究において『古事談』との関係が指摘されつつも、慎重な検討が必要とされてきた。本稿では、「延慶本」の引用方法を、『宝物集』卒塔婆流譚を中心に、確認した。『宝物集』では、たまたま隣り合わせに配列された康頼の和歌と蘇武譚が、「延慶本」の構想のヒントとなった可能性が高く、「延慶本」は直接引用だけでなく、その構想を引用する傾向にあることが確認できた。「延慶本」の引用方法の一端が見える場面といえる。

また、『古事談』においても、これまで指摘されていた巻六・二二話だけではなく、その前後の説話を見ていくと、「延慶本」青山説話のヒントと推測されるものが点在していることが指摘できる。したがって、「延慶本」が『古事談』を参照した可能性が高まったと考えられる。

註

- (1) 『新編日本古典文学全集』四七 小学館 一九九九年 五四～五五頁 —線や()内の注記は筆者が付したものである。
- (2) 『群書類従』一九輯 続群書類従完成会 一九三三年 二二七頁
- (3) 『延慶本平家物語』本文篇・下 勉誠出版 一九九〇年
- (4) 前掲(3)八九～九二頁
- (5) 水原一氏 『延慶本平家物語論考』第二部資料関連 二、廉承武と後村上帝——古事談・十訓抄との関連——加藤中道館 一九七九年 二六〇頁
- (6) 磯水絵氏 『院政期音楽説話の研究』第四章『平家物語』から——「青山」と「獅子丸」〔名器考〕——和泉書院 二〇〇三年
- (7) 山田昭全氏 『平家物語と仏教』(『山田昭全著作集』八卷) 第二編『平家物語と宝物集』第二章『宝物集』と延慶本『平家物語』——引用に三態あり—— おうふう 二〇一五年 一六七頁
- (8) 小泉弘氏は『古鈔本宝物集の研究』において、七卷本『宝物集』には『千載集』までの勅撰集が収載されていることに着目し、七卷本『宝物集』成立の目安とされている。
- (9) 『新日本古典文学大系』四〇 岩波書店 一九九三年 一六～一七頁
- (10) 山田昭全氏『平家物語と仏教』(『山田昭全著作集』八卷) 第二編『平家物語と宝物集』第一章『平家物語』「卒塔婆流」の成立——延慶本作者が『宝物集』に依って創作した—— おうふう 二〇一五年 一三三頁
- (11) 『新日本古典文学大系』四一 岩波書店 二〇〇五年 五三～五四頁
- (12) 『新編日本古典文学全集』五一 小学館 一九九七年 四〇五～四二頁
- (13) 岩佐美代子氏『文机談全注釈』 笠間書院 二〇〇七年 五三～六三頁

- (14) 落合博志氏 『古事談』 私注数則 『古事談』 を読み解く 浅見和彦編 第二編 古事談の説話世界 笠間書院 二〇〇八年
- (15) 前掲(11)四七六頁
- (16) 前掲(3)四五九頁
- (17) 前掲(14)に同じ。